

注目のキーワード「ワーケーション」

最近、報道などで「ワーケーション」という言葉を良く耳にするようになりました。ワーケーションは「ワーク」(仕事)と「バケーション」(休暇)を組み合わせた造語です。観光地や帰省先などで働くことを指しており、コロナ禍によって需要が大きく落ち込んだ観光業の回復の一助となる「新しい旅の形」としても注目されています。政府は7月27日の観光戦略実行推進会議においてワーケーションの普及に取組む方針を打ち出しており、現在検討が進められている次期「観光立国推進基本計画」においても振興に向けた施策が盛り込まれることが想定されます。

一口にワーケーションといっても様々な類型があり、例えば「観光地・帰省先・サテライトオフィスなどで通常業務や研修を行う」といった仕事を中心とするケースや、「休暇の滞在先で一部の時間を割いて業務を行う」といった休暇を中心とするケースなどが挙げられます。前者は言い換えれば、コロナ禍で急速に広まった働き方である在宅勤務を、自身の居住地以外の場所で行うものとなります。また後者は、余暇の最中に滞在先で一定の仕事をこなすことで、長期の休暇取得を可能とするメリットがあります。その他にも、一般にプレジャーと呼ばれる「業務出張の前後に滞在期間を延ばすなどして観光を楽しむこと」も広義のワーケーションといえます。

ワーケーションは現状では観光と絡めた「新しい旅の形」として語られがちですが、いろいろな種類があることから分かる通り、多様な働き方を可能にする「新しいテレワークの形」として捉えた方がその意義を理解しやすいかもしれません。

今後、ワーケーションの普及を考えていく上では、企業側が取組むべきこととして、例えば旅費等の支給や労災補償の適用とするといった労務面の整理のほか、その企業が受け入れやすいモデルケースを見極めて可能なものから社内制度化していくといったことが重要となります。もちろん、企業を誘引するためには導入によって生産性向上がもたらされることも大事です。また当面の間は、ウィズコロナの状況が続くことを念頭に、3密対策を中心にした安心・安全の確保も求められます。

いずれにせよワーケーションの普及はこれからの取組みです。その過程においてノウハウが蓄積・改善されていくことで、使い勝手が良くなり、活用の幅が広がっていくことも期待されます。

(政策調査部 次長 榎田 卓洋)

編集後記

なんやかんやと言われていたが「新しい生活様式」もだいぶ定着してきたようだ。マスク着用、手指消毒、ソーシャルディスタンスは当たり前となった。たまに買い物してレジに並んでいるとき、すぐ後ろに人が並ぶと違和感を感じ思わず振返ったりすることもあるほどだ。これまでも世界的な感染症の流行があり、その都度未知のウイルスはこれからも必ずやってくると言われながら、流行が収まると何事もなかったように「これまでの生活」に戻っていたが、今回ばかりはさすがに意識も行動も切り替えスイッチが入ったようだ。

COVID-19は日本の感染症対策の脆弱さ、デジタル対応の遅れを嫌というほど見せつけてくれた。感染症対策でいえばSARS、MARS、新型インフルエンザの国内での流行、被害がそれほど大きなものではなかったこともあり、その都度出される今後に向けた課題等の報告書が十分に生かされなかった。こんなことを繰り返していると「日本は危機に弱い国。世界的危機が起きるたびに相対的に国力を落としていくだけではないか?」とみられかねない。

大山鳴動鼠一匹という言葉をご存じだと思う。日本では大変だと大騒ぎしても結局鼠一匹しか見つからなかったのだから、むやみに大変だ大変だと大騒ぎするのはよくない、という意味で使われる。鼠が大量発生して被害が出るのが明らかになる前に大騒ぎするなということだ。

しかし、この考え方そのものが日本の弱さなのではないか。この発想でいる限り効果的な危機管理はできない。逆の大山鳴動鼠一匹でよかったではないかという発想こそがこれからの日本に必要なものだと思うが。(H.S)